様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０３９８３

研究課題名（和文）MCI及び初期認知症の人とその家族の二者関係への並行的調査・介入：前向き研究

研究課題名（英文）Research and Parallel Intervention to Dyadic relationship between MCI and Early Phase Dementia patients and their family members: Prospective Study

研究代表者
山田　裕子（Yamada, Hiroko）

同志社大学・社会学部・教授

研究者番号：８０２７８４５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は初期及び若年性認知症の患者のBPSD(Behavioural　Psychological Symptoms of Dementia)の生成防止のための介入に、その家族介護者への個別の心理社会的介入を組み込み、並行的介入(Parallel intervention)として、その効果を検証することである。認知症発症により本人と家族は困惑し、互いに責め、傷つけ合う険しい対立構造を特色とする二者関係となり、その二者が共に支援を必要としている。その支援の提供場所として、また欠如している社会参加の場所として、認知症カフェを有効に利用できることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究において、これまでは、家の外への社会参加もかなわず、何の支援も受けられずに、孤独のうちに敵対関係に陥り、BPSDを発達させた初期認知症および若年性認知症の人とその家族に対して、認知症カフェにおいて社会参加の機会と支援介入の提供を試み、両者の関係の目覚ましい改善が得られた。第1調査では、3組の認知症の人と家族の数年にわたる記録を分析することにより、初期に起こる認知症の人と家族の困りごととニーズを記録し、それに対する支援の効果を明らかにした。第2調査では、カフェの6人の介護者から、カフェに通う以前の困りごとと、カフェに通うことで解決できたことを質的分析により明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to develop parallel intervention to the early stage- and young onset-dementia patients and their family members individually to prevent BPSD and to evaluate the effects of the intervention.
After the onset of dementia, people with dementia and their family members often form severe antagonistic dyads where they are embarrassed, harsh, and blame each other. Each part of dyad needs support from outside. It became clear that Dementia Cafe can be the place for providing support and of the social participation for both parts of dyads.

研究分野：Social Work and Psychology

キーワード：初期認知症　若年性認知症　家族介護者　BPSD　二者関係　並行的介入

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

認知症の症状には中核症状と周辺症状(BPSD)があり、その２つの生起と因果関係に系統的な研究はほとんどなされず、BPSD に対しては抗精神病薬の投与での対応が広く実行されていた。一方、BPSD の多くの症状には、認知症患者の「理由」があるとの見方が家族や介護実践者、また Tom Kitwood を初めとする内外の研究者たちの間に高まってきていた。申請者らは、早くから初期(早期)認知症の人と家族介護者について研究し、2015 年の当研究開始までに BPSD と家族との関係について調査を続けてきた。認知症の発症という本人と家族双方を困惑させる出来事から生じる険しい対立構造を特色とする二者関係(dyadic ties)[1] において、互いに傷つけあい、それが患者本人の BPSD の生成に繋がる可能性が示唆されるが、その関係の改善に焦点を当てることに決めた。

そのような二者関係の力動は、医療及びケアの専門家が本人と家族に接触する前にすでに始まるため、十分に観察研究される機会を得られないため、実証的な研究は稀で、経験的に語られているにすぎなかった。介入の方法もやっと検討され始めたばかりだった。

申請者らのこれまでの研究(基盤研究(C)H19 ~22 年)では、認知症の人グループと家族介護者グループへのグループ介入が、BPSD の減少に効果を持つことを Randomized Controlled Trial によって検証できた。また、続く研究(挑戦的萌芽研究(H24～26 年)では、認知症の人とその家族への個別の介入の効果を調査し、認知症の人にとって感情表出が必須なものと理解されると同時に、家族も感情表出と心理的葛藤に対して、他者からの傾聴およびカウンセリングを必要としていることを理解した。認知症の発症によって本人と家族は「まとも」な会話の機会を失い、他者に自分の思いを聞いて貰える機会を切に求めているからではないかと推測された。つまり、認知症の人と家族は、社会参加の機会を切望している。社会の中に彼らが、そのままで受け入れられ、自分の思いと気持ちを語ることができる居場所を作ることが必要であることが理解できた。

２．研究の目的

本研究の目的は、初期および若年性の認知症の患者の BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia)を軽減するために、認知症患者とその家族介護者に心理社会的に並行的介入 (parallel intervention)する方法を確立し、その効果を検証することである。初期および若年性の認知症の人とその家族から聞き取りを行い、認知症の始まり以後の両者の生活上の困りごと、そこに生起する理解、感情、期待を記録する。必要とあれば、認知症発症以前の両者の生活様式、関係性についても情報を集め、両者の関係上、何が問題とされているか、両者の期待とニーズを明らかにすることにより、介入の方法を確立する。

３．研究の方法

上記の目的のために、2 つの調査を行った。

【調査１】は、この科研の主たる目的である認知症の人とその家族に対する並行的介入を行う場所として、認知症カフェ「0 カフェ」を選び、来店した認知症の人とその家族のうち、3 組の記録を取り上げ事例として分析した。アセスメントから始まり、3 組それぞれに対する介入についてのカフェからの方針、経過、介入の内容を時系列に検討した。この調査において、特に本人と家族双方が、認知症にかかった日常とその事態をどのように捉えているか、双方の語りと訴えを 10 数名のカフェヴォランティアスタッフとコーディネーターの記録を追うことにより明らかにしようと計画した。初期認知症患者とその家族介護者が、どのような心理社会的な問題を抱え、どんなニーズを持って居るかを明らかにし、カフェのスタッフがそれをアセスメントし、どのように対応し、働きかけたか、さらに認知症の人と家族がそれらの問題にどのように適応し、互いの関係を維持したかを探ろうとした。その過程で、認知症カフェのような場所は、認知症の人とその家族双方への並行的介入 (parallel intervention)を行う機能を備えていることが感知された。

【調査 2】は、［調査１］で感知された「カフェという形態が認知症患者とその家族介護者に心理社会的に並行的介入 (parallel intervention)を行う機能を備えている」という仮説を検証するための調査である。「0 カフェ」を含む近隣の認知症カフェ 3 か所に来所する家族介護者へのインタビューを実施し、その記録から、初期認知症の人と家族の困りごととニーズ、さらにカフェの機能と役割を検証しようとした。家族介護者 6 名へのインタビュー調査を質的に分析し半構造化面接を行い,同意を得て録音した．面接時間は一人当たりおよそ 1 時間，質問内容は「1.認知症カフェを利用する前にどのような困難を抱えていたか」,「2.認知症カフェ利用後,生活がどのように変化したか」,「3.今後の認知症カフェに期待すること」であった.インタビュー結果は逐語録に起こし,データ化し，質的分析した。

４．研究成果

【調査１】3 人の認知症の患者と家族への 0 カフェにおける並行的介入の事例。

(1) 0 カフェの概要。認知症の早期発見、早期診断が促進される中、早期に診断された場合にケアを提供する場が不在であることが問題とされ、また若年性認知症の人にとっても介護保険制度での対応が難しく、同様の課題があった。その中で、認知症対応型カフェについての国内外の多様な活動報告から、カフェが認知症の人やその家族、専門職やボランティア、地域の人々にとって有効なものと考えられた。0 カフェは 2012 年 4 月に任意団体としての活動を開始し、同年９月より、まちの縁側『T の家』を借りて、週に１回 11：00～15：00「0 カフェ I」として、カフェ事業をスタート、2014 年にはＮＰＯ法人化、2015 年には D 大学の「町家Ｋ館」に開催場所を移転し、名称を「0 カフェ」と改め、認知症カフェ事業を継続した。

2015 年度は 39 回開催、来店者（延べ人数）は、認知症の人と家族 547 人（本人 277 人、家族 270 人）、2016 年度は 36 回の開催で認知症の人と家族 406 人（本人 199 人、家族 207 人）であった。

(2) 並行的介入を構成する要素

① 0 カフェでの**基本的な過ごし方**は、本人と家族が好きな時間帯にカフェを訪れ、スタッフや他のカフェ利用者と、出会いや交流を楽しむ。原則として本人だけでなく、家族も一緒に来店する。

② **特別なプログラムは設けず、本人の好きなことや得意なことを発揮できる機会を設ける**。「読み聞かせ」「散策」「書道」「音楽鑑賞」「学生スタッフとの人生談義」「クロスワードパズル」「将棋」「合唱」「かるた」など多岐にわたった。

③ **カフェスタッフ**は、本人と家族のニーズを測り、本人同士、家族同士が話せる場面を提供し、必要に応じて専門職が家族の個別相談を受ける。カフェスタッフはケアマネジャー、社会福祉士、大学教員、鍼灸師などの専門職、認知症サポーター養成講座を受講済みで地域活動に経験豊かな市民ボランティア、さらに社会福祉士・介護福祉士の資格取得を目指す学生ボランティアなどで構成されている。

④ 毎回カフェ開催前後に**スタッフミーティング**を行う。カフェ開店前にはコーディネーターが来店者についての情報を提供し、支援の方向性をスタッフに提示する。閉店後のミーティングではスタッフ全員がすべての来店者の様子や語りの内容を報告し、自分たちの関わりや働きかけを振り返り、カフェスタッフ同士の共通理解を深めた。認知症の本人と家族支援のための場所である一方で、**「利用者とスタッフ」というケアする、されるの関係ではなく、「人と人との対等な関係」「横並びの関係」「双方向にモノが言えること」を前提とする場所**を目指している。

(3) 表１． 3 事例のアセスメント、カフェ方針。

	本人と介護者	病名	カフェのアセスメントと方針
第 1 事例	男性、76 歳 介護者　妻 70 歳	AD2012 年 3 月受診、AD。	妻と折り合いが悪く、喧嘩腰。言語能力に優れた本人の他者との会話機会を提供し、介護負担の高い妻も他の介護者やスタッフとの交流の機会を増やす。
第 2 事例	男性、82 歳 介護者　妻 81 歳	AD 失語症目立つ	意思疎通に困難のある本人の社交的な面を、長年の趣味のクラシック音楽をカフェで一緒に聞くことで発揮できないか？病識に苦しむ本人の感情の爆発に晒される妻のストレス軽減にカフェが果たせることを探す。
第 3 事例	女性、65 歳 介護者　夫 69 歳	AD 若年性発症	本人にはカフェ来店への拒否が見られ、家事、入浴、排せつなどが困難になってきたが、夫の支援を拒否し、夫の負担感は非常に高い。夫も妻の気持ちを尊重することが少なく、妻を傷つけていることへの自覚を促す必要があるようだ。

ここでは 3 事例のうち、第 1 事例のみ詳述し、第 2、第 3 事例は省略する。

[第 1 事例]　76 歳男性、妻は 70 歳。　2012 年 3 月にワープロや手紙の文字が判別しにくいと受診、AD と診断。2012/10/7　　妻と初めてカフェに来店。本人と妻と別々にインタビューを行い、生い立ち、してきた仕事、現在の生活について話しを聞くなかで、現在の問題が判明した。

2012 年来店当初の問題と本人と妻のアセスメント

自宅では本人はいつもイライラと不機嫌で、妻と折り合いが悪く、互いに殆ど話をせず、すればけんかになる。元の勤務先の同僚との定期的な会合が唯一の外出だが、道に迷うなどの記憶の問題が最近出てきたため、一人で帰宅できるのか心配で参加を躊躇ている。外出先がほとんどなく、

社会参加の機会を失っている。本人は養子に行った外地から日本に帰国し父母に再会するまでの多難な幼少期の経験をよく覚えており、それを人に語ることを楽しみにしている。高度経済成長時代を通じて、住宅の腕利きセールスマンとして、日本全国に赴任し、各地の方言や地酒にも精通しているが、子育てに忙しかった妻とは次第に会話が減って行き、物事に対する関心、趣味、態度などが互いに違い、理解や共感をもてず、思いやりや喜び、活気などが乏しい。

繊細で律義な気質ながら、言語能力に優れ、機転や機知に富んだ他者との会話や反応を喜びとする。そのような楽しみや感情表出を実現できる場所として、カフェへの参加を喜んでいる。カフェで、同病の友人たち、中高年のボランティアスタッフ、さらに学生ボランティアとのジョークやウィットに富んだやり取りが可能である。

カフェの方針（表１に記載）。

本人と妻のカフェにおける過ごし方、カフェからの働きかけ

３時期①2012 年から 2014 年の認知症初期、②2015 年の適応期、③2016 年の進行期における本人と妻のニーズと、本人と妻とカフェとの関係、経過、介入をみる。

①2012 年から 2014 年の認知症初期　診断前後は自宅にこもりがちで、職業人として培ってきたサービス精神に富んだジョークやギャグなどを用いた人々との交流の機会を失い、妻と会話もない不機嫌な関係しか持てていなかったが、カフェに参加後、妻にも話したことのない波乱にとんだ「自分史」を語り、自分自身の社会的な存在意義を見出し、「こんなに楽しいなら、病気になってよかった」との名言を吐いた。カフェにも、「病気と言う皆の共通分母ゆえに、気楽に話せるところ」との存在意義を明確にし、カフェの存続を願い、共に作っていこう、との提案もした。ユニークな参加者としての登場に、他のカフェ参加者も喜びをもって歓迎し、本人から提供される愉快さを十分に享受できた。

②2015 年の適応期　本人と妻が、居をカフェの近くに移してまで、カフェで過ごす時間を楽しみに参加する時期であり、カフェの存在が本人と妻にとって、色々な役割を果たすことできた時期である。足腰の弱体化にカフェスタッフや他のメンバーがいち早く気が付き、介護保険サービスである運動デイの利用を勧め、渋っていた本人もついに通うようになった。また、カフェの行き帰りの不安に対して、カフェスタッフと妻が電話で確認し、安全を確保できた。

③2016 年の進行期　一方では妄想めいた話や繰り返しがふえ、白内障、歯の治療など、健康面の様々な問題が出てきたことに妻の負担感が増した時であるが、他方では運動デイへの参加が奏功し、足腰が強くなり、また、妻のカフェ参加の頻度と度合いが増し、それまで受身的かつ閉鎖的だった妻の心理的な開放感が増加したのか、笑顔と積極的な発言も増え、必ずしも衰退のみではなく、それに対する本人と妻双方の様々なレジリエンスを確認することができた。

調査１のまとめ　３期それぞれに本人と家族はそれぞれユニークなニーズを抱えていた。カフェスタッフはそれらを聞き取り、見逃すことなく、双方に働きかけることができた。

調査１はすでに大阪ガス研究報告書に詳細を報告している。

【調査 2】初期および若年性認知症の人と家族の困難とニーズ―家族介護者から見た認知症カフェの機能と役割―

対象者 6 名は認知症の人の介護者で、夫 3 名、妻 2 名、妹 1 名、居場所型の X カフェから 3 名、地域型の２カフェから 3 名。インタビュー内容から、「認知症高齢者の状況」、「家族が抱える困難と負担」、「認知症カフェの役割」、「家族介護者が認めた変化」の 4 分野に分類できた。

結果

このインタビューに応じた初期の認知症の人の家族は、認知症本人の症状にどう対応してよいか解らず、どこにも相談できず、対応方法についての情報も得られないまま、本人との関係性にトラブルを抱えて、将来への不安を募らせていたことを明らかにした。カフェに参加するようになり、介護者は本人がカフェを心地よくふるまえる自分の居場所としていることに気が付いたが、それはカフェスタッフが本人の趣味や得意分野を聞き出し、本人がカフェでそれを披露し、喜んで語る場所にしていたのだった。同時に、介護者はカフェにおいて他の介護者と介護の辛酸を語り、介護方法を伝授し合うことができた。そのような情報から学び、自宅における介護を改善でき、認

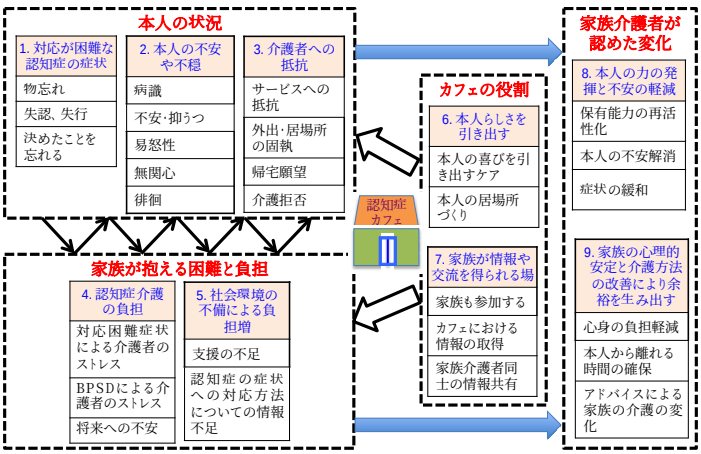

図1. 認知症カフェの機能と役割

知症の人との関係にも改善を見て、介護の日々が以前よりも余裕のあるものになったことを認めた。カフェに本人と家族が参加し、しかし同時あるいは別々の活動の機会を持ち、悪循環に陥っていた介護が好循環に変わったと認めている。

考察

初期の認知症の人と家族は、認知症の極く初期から対応方法に困り、たちまち関係性にトラブルを抱え負担感が大きかったが、カフェから本人と家族が別個に支援を受けることができ、双方に良い変化が生じ、関係にも改善があったことを家族が認めた。家族介護者のことばから認知症カフェのこのような機能と役割の一端が明らかになった。最近では認知症カフェに「予防を望む」人たちの参加が多くなり、認知症の人と家族が気圧されて参加しにくくなった、との報告もなされている。この聞き取りで明らかになったように、情報や支援もなく、孤立状態になるなど、初期及び若年性の認知症の人と家族が、実際に直面している困難に、認知症カフェがしっかりと役に立ったうえで、「予防を望む」人たちにもお役に立つことが必要なのではないだろうか？そのためにも初期及び若年性認知症の人たちが、一刻も早くカフェに繋がる工夫がなされると同時に、彼らのニーズに対応したサービスが確実に提供できるように、ニーズの発掘とサービスの探求がなされることが望ましいと思われる。

調査２はすでに日本認知症ケア学会でポスターにて発表している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① Honjyo Y，Takechi H．Japanese Old Stories Cognitive Scale: A screening test to detect cognitive disease and prompt visiting a memory clinic．Psychogeriatrics（印刷中）査読有

② Takechi H, Yabuki T, Takahashi M, Osada H and Kato S．Journal of the American Medical Directors AssociationDementia Cafes as a Community Resource for Persons with Early-stage Cognitive Disorders: A Nationwide Survey in Japan．Journal of the American Medical Directors Association，(印刷中) 査読有

③ 杉原百合子，岩崎陽子．スウェーデンにおける高齢者介護施設視察報告．嵯峨美術大学紀要，44，51-56，2019．

④ Hajime Takechi, Yuriko Sugihara, Hitomi Mtsumoto, Hiroko Yamada．A Dementia Café as a Bridgehead for Community-Inclusive Care: Qualitative Analysis of Observations by On-the-Job Training Participants in a Dementia Café. Dement Geriatr Cogn Disord，46，128–139，2018．査読有

⑤ 山田裕子、武地　一、杉原百合子、認知症の人と家族への初期集中支援としての並行的介入:BPSDの心理社会学的なメカニズム解明とその解決を目指す介入の試み　　大阪ガスグループ福祉財団研究報告書,30,75-87,2017 査読無

⑥ 杉原百合子．認知症の人と家族に対する意思決定支援と看護職の役割—人間福祉学研究，第９巻１号，21-34。2016　査読無

⑦ 杉原百合子，山田裕子，小松光代，山縣恵美，岡山寧子．認知症の人の意思決定における介護支援専門員の支援に関する文献レビュー．同志社看護，第 1 巻，29-37，2016　査読有

〔学会発表〕（計 8 件）

① 山田裕子，肖峥楠，鄭熙聖，朴蕙彬，杉原百合子，武地一．初期および若年性認知症の人と家族の困難とニーズ：家族介護者から見た認知症カフェの機能と役割．第 20 回認知症ケア学会大会，京都，2019．

② Hiroko Yamada, Keiko Aoki, Yuriko Sugihara, Hajime Takechi．Parallel Support to the patient in early–phase dementia and family : Improvement of their relationship．32nd International Conference of Alzheimer's Disease International ，Kyoto, Japan，2017.

③ Hajime Takechi, Toshio Mori, Futaba Miura, Yuriko Sugihara, Hitomi Matsumoto, Yukihide Nishimura, Akira Kuzuya , Takehiro Matsumoto, Wataru Miyajima, Hiroaki Kazui, Shuichi Awata．INTERACTIVE APPROACH, A NEW TYPE OF TOOLS AND A CARE PRACTICE USING THEM TO PROMOTE COMMUNICATION AMONG PEOPLE DIRECTLY INVOLVED IN DEMENTIA, PROFESSIONAL CAREGIVERS AND PHYSICIANS. 32nd International Conference of Alzheimer's Disease International，Kyoto，Japan，2017.

④ Yuriko Sugihara, Hiroko Yamada, Hajime Takechi．THE ROLE OF MEMORY CLINIC ON IMPROVING CARE ENVIRONMENT FOR PATIENT WITH DEMENTIA．32nd International Conference of Alzheimer's Disease International，Kyoto，Japan，2017.

⑤ Sugihara Yuriko, Yamada Hiroko, Komatsu Mitsuyo, Yamagata Emi, Komatsu Kazuko, Okayama Yasuko，Takechi Hajime．Commonality and Difference of Eligibility Factors Considered By Care Managers on Three Types of Long-Term Insurance Services for

Patients with Dementia ： Factor Analysis on Results of a Delphi Survey to Care-Management Professionals. Alzheimer's Association International Conference（AAIC），Toronto，Canada，2016.

⑥ 杉原百合子，山田裕子，小松光代，山縣恵美，岡山寧子，武地一．認知症の人の介護サービス利用検討時に考慮する要因－介護支援専門員に対するデルファイ法調査をもとに－．第 58 回日本老年医学会学術集会，金沢，2016.

⑦ 杉原百合子，山田裕子，岡山寧子，小松光代，山縣恵美，武地一．認知症の人の介護サービス利用の意思決定に関する支援の現状と課題. 第 57 回日本老年医学会学術集会, 横浜, 2015.

⑧ 杉原百合子，山田裕子，岡山寧子，小松光代，山縣恵美，武地一．認知症高齢者の介護サービス導入の意思決定支援における介護支援専門員の困難経験．第 16 回日本認知症ケア学会大会，札幌，2015.

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：武地　一
ローマ字氏名：Hajime Takechi
所属研究機関名：藤田医科大学
部局名：医学部
職名：医学部
研究者番号（8 桁）：10314197

研究分担者氏名：杉原百合子
ローマ字氏名：Yuriko　Sugihara
所属研究機関名：同志社女子大学
部局名：看護学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：90555179

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。